

## コメント 2: 熊田陽子(日本学術振興会・特別研究員 SPD/首都大学東京)

### Comment 2: Yoko Kumada (JSPS Research Fellow SPD)



私も新ヶ江先生と同様、セクシュアリティの観点からコメントしたい。私はこれまで東京都市部の性風俗店でフィールドワークを行い、そして今は、オランダのアムステルダム飾り窓でも調査を開始した。その過程でセクシュアリティを重要な検討対象と考えてきたのであるが、ジェンダーについて考える時、セクシュアリティの視点が抜け落ちるという現象をしばしば目にすることがある。そこで今日は、セクシュアリティの問題系を念頭にコメントと質問をしていきたい。以下、発表順に議論していく。

最初に、ピコーネ先生のご発表についてである。私自身よく知らないことがたくさんあり、大変勉強になった。まずピコーネ先生の発表をジェンダーの観点から振り返ってみると、男性に対する言及がかなり限られていたように思う。このこと、つまり男性の存在について触れない（おそらく正しくは触れられない）ことを通じて、水子の問題が女性の間で片付けられている、更にいえば片づけるべきとされている事実を端的に示そうとなさったのではないかと思う。女性への押しつけである。しかしこれは、異なる角度から見れば、水子の文脈から男性が排除されていることを示してもいる。実は「もっと関わりたい」と思っている男性もいるかもしれないのに、それが叶わないというわけである。そういった側面を発表全体から浮き彫りにする手法をとられたといえるだろう。

ピコーネ先生には、セクシュアリティの観点から、水子という実践にかかわる女性たちの意識についてお訊きしたい。発表の中で、水子供養を行う女性が抱く罪の意識をとりわけ重視し、それについての語りが増加した時代について触れられていた。それでは女性たちは、そこにいたる原因となった性行為については、どういう意味付けをしているのだろうか。水子は性行為をしたからこそ生じたものである。罪の意識を持ちつつ水子について思い続ける女性たちは、では、性行為についてはどのように思っているのだろうか。それにもやはり罪の意識を持つのか。更に、その後彼女たちの性行為（とそれにいたる過程）、性行為についての認識には何か変化が生まれるのか。こういったことを可能な範囲でお答えいただきたい。

ピコーネ: 私でも男性の関与については大きな関心を抱いており、知りたいことはたくさんある。例えば、どのくらいの人数の男性が水子供養に参加するのかという点についてなどである。参加の形

は様々なので、それぞれが何を考えているのかを定かにするのは難しい。供養の席に参加するものもあり、聞いたところでは20人に1人程度の割合とのことだ。また、団体でその場に参加することも見受けられるが、そこで直接話しかけてインタビュー調査をすることは難しい。見たところ、男性のほとんどは女性に付き添っている様子である。年配や若い女性も見られるが、水子供養が行われている寺が観光目的の訪問先であることもある。…女性は男性から、水子の責任について責められ続けてきた。しかし、女性を責めるのは男性だけとは限らず、様々な宗教において中心的な活動をしているのが女性であることも多い。罪悪感については、女性間で作られる言説が働いている可能性が高い。原因としての性行為への罪悪感については、まだわかっていない。私は罪の意識を水子供養言説のすべてとは結論づけない。どちらかという、実際に人々がどう感じているかということよりも、規範的誘導の要素のほうが強いからである。罪の意識について繰り返し聞かされると、罪の意識が湧いてくるということもあり、また、罪の意識を感じないということについて罪の意識を感じたりする。つまり、罪悪感についての心理的言説のすべてが宗教的というわけではない。

次に松岡先生のご発表についてである。実は松岡先生の話聞きながら、身が縮む思いだったことを告白せねばならない。松岡先生は、「ジェンダー公正」あるいは「ジェンダー平等」を、ジェンダーについて考える際の核に据えられていらっしやると理解した。しかし私は自分のフィールドにいと、ジェンダー公正といった考えを失念してしまうことがしばしばある。例えば、性風俗店で働く女性たちが、いわばジェンダーの差、もしくは格差をむしろ積極的に活用してお金を儲ける姿、あるいは、SMプレイを行うなかでM男（エムお）といわれる人々が「強いはずの男なのにこんなにいじめられちゃう俺」というシチュエーションを享受している姿に、どうにもシビれてしまうからである（そしてジェンダー公正といった問題について忘れてしまう）。

以上はコメントにも満たない私のリアクションであるが、松岡先生には改めて、以下のことをお聞きしたい。先生のご専門であるリプロダクションとは、セックス、ジェンダー、セクシュアリティが三つ巴になった興味深い現場であると感じる。そこでリプロダクションを対象とした時のセクシュアリティとジェンダーの関係について考えてみたのだが、例えば韓国では、セクシュアリティがジェンダーを作っていると理解できないだろうか。「産む」という一連の作業をセクシュアリティと捉えた時に、それが「女性とは…産めるし、しかも、セクシーである（ものである）」という女性ジェンダーを部分的にせよ作っているという可能性である。しかもそれは、周りから押しつけられているというよりも、女性たちが積極的に作り出しているという可能性である。だとすれば、産むというセクシュアリティの実践を通じて、女性たちはジェンダーを構築していることになるだろう。それに対して日本では、逆に、ジェンダーがセクシュアリティを作っている可能性はないだろうか。例えば、

日本では出産の際に麻酔を使わない傾向が強いということであるが、これは、既に「女たるもの（麻酔など使わず）痛みを耐えるもの」とするようなジェンダー的な期待があり、女性たちはそれに従って行っている（つまりセクシュアリティを作り上げる）という可能性だ。これはあくまで、発表を聞くなかで得た印象であり、素人考えに過ぎない。松岡先生が具体的に色々な研究をなさる中で、リプロダクションの現場でジェンダーとセクシュアリティはどのような関係にあると実感しているのか興味があるので、その点についてご意見を伺いたい。

松岡：産むという行為が文化によってさまざまな形で行われることで、ジェンダーが構築されているという指摘は、確かにそのとおりかもしれない。生物学的には同じ出産という行為が、文化によって違う面が強調され、女性たちの行動も違うわけで、そういう多様な行動を通じてそれぞれの社会の女の魅力や価値、母親の規範的な行動などのジェンダーが作られていると見ることができる。

最後に加藤先生のご発表についてである。加藤先生は「人類学の立場から日本を研究するにおいてジェンダーは有効か」という問い自体を問い直し、「人類学の立場から、外から日本研究をするという実践を再考するにあたりジェンダーは有効である」というスタンスを導き出しているとしたと理解した。更に、海外の日本研究者が（意図せずとも）日本を他者化していることが、加藤先生による批判の柱のひとつであったと捉えた。確かに私自身も先日オランダに行った時、ある若者から「一度でいいから僕日本に行ってみたいんだ。日本ってすごいんでしょう！」といわれ、何が「すごい」のかわからなかったという経験がある。もしも、表面的には無邪気にも見える好奇心を含めて、関心の持ち方自体が日本を他者化し続けているとしたら、提起された問題は更に広く議論されるべきことは間違いない。そう前提しながら、以下、セクシュアリティの次元からひとつコメントをして、その上で意見を伺いたい。

ご発表の中では、ある地域や文化を過剰に性的に表象することで他者が遂行可能であると論じていらした。しかし、〈性的存在とさせることで相手を貶める（他者化する）〉という戦略は、普遍的に有効なものなのだろうか。乱暴に分けるなら、いわゆる西洋では、セクシュアリティとは隠すべきものという前提がある。お上品な紳士淑女たるもの、下品なセクシュアリティは表向き遠ざけるものだ、という認識である。他方日本では、性は日常生活と地続きとされてきた。例えば春画は笑いながら複数人で楽しむものであったし、地女つまり、いわゆるプロの遊女でない女性たちこそが、むしろエロと結びつけられていた。そういうことを考えると、少なくともかつての日本でセクシュアリティ（性）は、「こそこそ隠れて何とか」という性質のものではなく、日常と切り離す

ことのできないものであつたらう。確かにこうした日本の特異性が、現在でも有効かどうかという問題には慎重な検討が必要とならう。しかし、性風俗店で働く女性を例にして考えてみると、セックスワーク論において前景化する「プロの労働者」という意識が不在なまま、ちゃっかりと風俗嬢になって稼いでいたりする人が多い。また、昼間はいわゆる堅い仕事に就きながら、空いた時間や仕事帰りに性風俗店で働いている人も少なくない。そうした人々を見ていると、源氏名で働いているため形式上は切れ目がつけられているとはいえ、実際の生活においては、セクシュアリティは日常と地続きであるという理解が（少なくとも性風俗店という文脈では）しっくりくる。そうすると、日本が改めて性的な存在にされたとしても、もともと日常の一部なのだから、果たして日本人にそれは痛手なのだろうか、とも考えてしまう（性的であることは当たり前だといひ返してやればよい）。

以上のコメントに重ねつつ、ご意見を伺いたいことがある。もし「対象とする社会にとって性とは何か」という問題を研究者が熟慮するならば、そして日本研究の場合は、性を日常と切り離されたものとする考え自体が西洋的エスノコンセプトであるという可能性に自覚的であるならば、性的なものや奇天烈なものに興味を持ち、それをきっかけに日本研究をすることを否定するのは困難ではなからうか。例えば、性の研究は、性を見ているようで実はそこから様々なことが派生的に見えてくるものであると私自身は感じている。ならば、最初は「異常」「興味本位」としか思えない研究対象でも、後から何が見えてくるかわからないという意味で、やる価値がゼロとはいいい切れぬ。また何より、興味を持ってしまった人は止められないとも思える。この点についてどうお考えだろうか。

加藤：熊田先生のようなセクシュアリティ研究、フィールドワークをされている方の視点ならではの質問だと思う。ただ、私が問題としたいのは、国際学会で、そうした日本の性的表象のポップカルチャーのプレゼンテーションがなされる時というのは、往々にして、学術的な考察が充分なされていないということだ。マテリアル自体が面白いというような形で、ほとんどアナリシスがなく、事例だけ挙げて終わるようなプレゼンテーションになっている。しかし、そういうセッションが、立ち見が出るほどのすごい人気である。それこそ、「すごい」ものが見られるぞ、という感じで、若い人からベテランの学者までぎっしりの入りになる。私はそういうのを10年以上見てきて、実際にその場で立ち上がって、「なぜ、日本について、このトピックで、このようなプレゼンテーションをするのか？」という質問をしたこともある。どう学術的に提示するか、という面で、明らかに他のテーマと扱いが違うということがあり、その点を今日の発表に含めた。